

三井物産環境基金 2015年度 研究助成 助成案件一覧

研究課題	団体名	代表者	案件名	案件概要	助成期間	申請金額(千円)
地球環境	国立大学法人 東京大学	准教授・センター長 後藤 晋	北方森林生態系の温暖化に対するストレス応答プロセスの解明	現在、急激な地球温暖化が進行し、森林生態系にも大きな影響を及ぼしつつある。固着性で繁殖までに時間がかかる樹木では、現存する個体群の多くがそのまま変動した環境に曝されると考えられる。本研究では、北方域を代表する針葉樹3種を温暖な2地域に移動し、異なるレベルの温暖化を強制的に経験させることで、成長・生理・遺伝子発現の応答プロセスを解明するとともに、3種の種間関係がどのように変化するかを明らかにする。	3年	¥4,950
資源循環	国立大学法人 高知大学	准教授 斉藤 知己	絶滅危惧種アカウミガメの脱出直後の興奮状態(フレンジー)を活用する孵卵条件の検討	絶滅危惧種アカウミガメの産卵地では、卵を安全な場所に保護し、孵化させた幼体を放流する活動が盛んである。しかし、その多くで、脱出直後の幼体に特有なフレンジー(運動活性の著しく高い興奮状態)という、捕食者の多い沿岸域を速やかに離れ、成育場である沖に泳ぎ出す為の性質を活かす配慮がなされていない。本研究はアカウミガメの孵卵と幼体の保管条件を再検討し、幼体のフレンジー効果を高める、適切な管理方法を提案する。	3年	¥3,000
生態系・共生社会	公益財団法人 日本鳥類保護連盟	室長 藤井 幹	絶滅危惧種コアジサシの越冬地・渡りルートの把握と保全のための活動	渡り鳥であるコアジサシは絶滅危惧種として世界的に保全対象となっている。貴団体からの助成により、本州で繁殖する個体群の渡りルートは分かっていたが、この結果により越冬地がこれまでの知見とは異なることが分かった。より詳細な越冬地の把握、さらには越冬地が異なることが予想される九州以南の個体群の渡りルート・越冬地を把握し、国際的に保全を呼びかける。	3年	¥12,800
生態系・共生社会	国立大学法人 岡山大学	教授 坂本 圭児	気候変動と社会的要因によるモンゴル国北方林の劣化メカニズムとその修復保全	モンゴル国北部の北方林を対象として、山火事と違法伐採の有無の組合せによって設定された4つの調査区で、実生と稚樹の定着及び成長と環境条件との関係を調査し、気候変動による山火事の大規模化と社会的要因としての違法伐採という2つのかく乱が森林構成樹種の更新に与える影響を検証し、森林の劣化メカニズムを明らかにする。同時に、その結果をもとに構成樹種の播種実験を行い、山火事後の修復保全手法を確立する。	3年	¥4,972
生態系・共生社会	地方独立行政法人 北海道立総合研究機構	研究主幹 明石 信廣	保残伐による森林景観の持続的管理手法の提案	日本の人工林は不均衡な齢構成やバイオマス資源としての伐採圧力によって将来の持続性が危惧される。本研究では、皆伐の影響を緩和する「保残伐施業」が生物相や水土保全機能に及ぼす効果を、国内では最大規模の実証実験によって検証するとともに、それを広く実施した場合の木材生産や公益的機能の変化を景観スケールで評価し、木材生産と森林の公益的機能をともに持続的に発揮させる森林管理手法を提案する。	2年	¥10,000
生態系・共生社会	国立大学法人 京都大学	研究員 菊池 夢美	ブラジルのアマゾン川に生息する大型水生ほ乳類マナティーの野生復帰における適応評価法の確立	アマゾンにおいて特に絶滅が危惧されている水生ほ乳類マナティーを対象に、密猟等によって保護された個体を再び野外へと放流する野生復帰事業を実施する。本研究では、これに必須である放流個体の野生への適応を評価する方法を確立する。音を利用した摂餌行動観測と住民参加型プログラムを整備して長期モニタリングを実施する。本研究により、持続可能な野生復帰事業が実現できると期待される。	3年	¥8,523

研究課題	団体名	代表者	案件名	案件概要	助成期間	申請金額(千円)
生態系・共生社会	学校法人札幌大学	教授 早矢仕 有子	絶滅危惧種を「隠すから見せる」への保全策転換に向けた学際的研究	絶滅危惧種シマフクロウでは、国が生息地情報を非公開にし続け、営巣地等へのヒトの侵入を防ごうとしてきたが、写真撮影目的のバードウォッチャーが入り込んだり、餌付けで個体を誘引し集客に利用している宿泊施設も存在する。本研究では、既に生息地を隠すことは不可能であるとの前提を踏まえ、シマフクロウを主な対象として、絶滅危惧種の個体群存続に悪影響を与えない「見せ方」を探求し、保全と観光利用の両立を目指す。	3年	¥6,300
生態系・共生社会	国立大学法人神戸大学	特命助教 古川 文美子	マングローブ植林地におけるノギリガザミを用いた生態系修復と資源回復の評価指標構築	植林活動によるマングローブ生態系修復は、定量的な評価方法は確立されていない。さらに、植林後は地域住民の資源利用を禁止した囲い込みの管理がなされることが多いのが現状である。本研究では、生態修復だけでなく、地域住民の生業を通じたマングローブ再生を評価できる指標として「ノギリガザミ」に注目する。そして、地域社会の現状にどうかたちでの資源利用・管理を提案することで、地域社会とマングローブの共生を目指す。	3年	¥4,723
生態系・共生社会	国立大学法人北海道大学	助教 中村 剛	国境を越えて分布する北海道「指定希少野生植物」をモデルとした、「国際共同保全」システムの確立	北海道の「指定希少野生植物」の多くは、極東ロシアなど北方域に同種や同種の可能性がある近縁種をもつ。しかし、従来の保全計画は国境という非生物学的な枠組みで活動が制限され、効果が損なわれている。本研究は、海外研究者と協力し、北海道と北方域の集団間の遺伝子流動（種子・花粉の移動によるつながり）を明らかにし、道内・北方域の自生地集団の保全、北大植物園における保護・増殖を行うことで、効果的保全を推進する。	3年	¥6,372
生態系・共生社会	The Australian National University	Assoc. Prof. Jamie PITTOCK	Scoping floating rice-based agro-ecological farming systems for a healthy society and adaptation to climate changes in the Lower Mekong Region and Myanmar	本研究は、カンボジア、ベトナム、ミャンマーにおける伝統的な農法である浮島方式の米作を改善する。農法の改善により、米作の収益性の向上及び多様化を進め、自然資源の再利用を促進し、貧困状況にあるコミュニティの栄養改善につなげることを目的とする。研究を通じて、現状の浮島方式の米作地域の拡張、コスト及び収益の把握、維持及び拡大にあたっての課題の整理、自治体及びステークホルダーの参加について評価を行い、ワークショップを通じて研究成果を普及させていく。	6ヶ月	¥3,000

合計：10件

64,640千円